

青森県所在日記体史料

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	書名	期	間	筆者	公私の別	所蔵者	備考
多志南美草	伊紀乃松	田名部通惣山日	菊池家記	万戸藩日記	八戸藩日記	永禄日	榑日	草案	梅田日	西谷日	滝屋日	山形家記	平山日	弘前藩庁日記							
天保九	文化五	明和八	寛政九	天保一四	寛文五	永禄一	明治二	明治七	慶長九	嘉永一	嘉永六	天文一	天文九	寛文一	自	至	明治一	山形 宇兵衛	私	平山啓一郎	六冊
明治五	文化六	安政五	大正八	慶応三	安永七	明治四五	明治一〇	安永二	安政四	明治四	天保一五	享和三	明治一	明和五	至	明治一	伊東 彦太郎	私	青森・凶	一八冊	
大岡長兵衛	菊池成章	菊池成章	菊池清祇外	石井良助外二	山崎立朴	榑喜洋芽	笹儀助	西谷平兵衛	伊東彦太郎	山形宇兵衛	平山半左衛門	山形宇兵衛	平山半左衛門	平山半左衛門	筆	者	公私の別	所蔵者	備考		
私	私	私	公	私	公	私	私	私	私	私	私	私	私	公	公私の別	所蔵者	備考	大岡広治	四二冊		
	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	上杉修	北畠顯文	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶	青森・凶
	四冊	一冊	二五冊	七六冊	二六〇冊		欠本七冊	七冊	一冊	三冊	六冊	一八冊	六冊	四、五二五冊	備	考					

小笠原二郎

22	楚堵賀浜風	21	紀行三千里	20	新岡累代記	19	道中日記帳	18	明治日記	17	諸用日記誌	16	原始漫筆風土年表
	天明五		元文三		天文一九		文久二		文久一		文政七		寛永五
	文化四		宝曆六		慶応一				明治三		慶応一		文政一
	菅江真澄		建部綾足		新岡		菊地嘉太郎		平尾魯仙		葛西文弥		村林源助
	私		私		私		私		私		私		私
	佐竹家外		青森・囃		新岡栄		菊池盛久		弘前・囃		葛西誠一郎		村林源助
	一一冊		三冊		三冊		一冊		五冊		三冊		欠本 五二冊

近世の青森県の姿をたどる場合、日記類がどれだけの役目を果たすかについては多くの先学の研究成果をみればうなづかれるところである。しかし、これまでこの日記類を一括して近世史料として取り上げた例を、不幸にして知らない。このたびそれを取り上げた理由も此処にある。

いままでのところ、調べ上げたものは別表のとおり、(1)弘前藩庁日誌から(2)楚堵賀浜風まで二二種、この内、公用のものは(1)弘前藩庁日記、(10)八戸藩日記および(11)菊池家記の三種で、あとはすべて個人的記録である。ただ前述の通り、弘前、八戸両藩の日記が現存するにもかかわらず、黒石津輕藩の記録が煙滅したことは惜しまれる。また七戸南部藩、明治初期の斗南藩(県)のものも、当然存在した筈なのだが。

以上二十二種類の日記をすべて紹介する紙数も、必要もいまはないが、この内特記すべきものをごく簡単に特性について触れるだけにしたい。

(3)山形家記はかつて弘前藩の郡奉行であった山形宇兵衛(長年)が退隠後筆録したもので各種記録を引用した藩政批判の記録として注目したい。中にも、天明の凶年に対する批判はきびしいものがある。(4)滝屋日記はすでに「青森市史」の一巻として公刊されているから言う必要はないが、筆者の伊東彦太郎は、幕末から明治維新に至る過渡期の動乱の渦中にあつた人だけに、津輕・南部両藩の交渉の機微をうがって興味深い。(7)草案(8)櫛日記はそれぞれ、郷土の両先覚のいつわりのない人間記録で、特に前者は、笹森儀助が、明治初期下北半島の住民が、如何に新政に対して反撥し、また儀助自身が如何にこれを批判したかがうかがわれよう。(9)永禄日記は浪岡北畠氏の後胤といわれる北畠氏の所蔵する貴重書だが、秘蔵する余り、すでに虫害に侵され、文化財保存のため惜しんでも余りある。(11)万日記は先年、拙著「かたむり抄」にその片鱗を紹介して置いた。(12)菊池家記は、本名「雑書」これは、盛岡南部藩の藩庁日記「雑書」の原稿となつたもので、当時

(三五頁からつづく)

田名部代官所の物書である菊池氏がその控書として伝存したものである。

最後に上記の内、未刊のものを挙げると、(3)山形家記(5)西谷日記(7)草案(8)榊日記(1)万日記(2)菊池家記(4)伊紀乃松原(17)諸用日記など。既刊のものは、(2)平山日記、(4)滝屋日記(9)永禄日記(15)多志南美草(16)原始漫筆風土年表、(18)明治日記(20)新岡累代記(21)紀行三千里(22)楚堵賀兵風などである。

(追記) 本来この論稿は去る昭和五十年十月五日研究発表した要旨を敷衍して「諸家日記類成立の原因と社会意識の研究」としてまとめるべきであったところ、草稿半ばで、入院を余儀なくされたため、これを断念し、紹介文として披露した次第である。